書　評

Isaac Backus and the American Pietistic Tradition.

By William G. McLoughlin. Boston: Brown and Company, 1967

Isaac Backus on Church, State, and Calvinism: Pamphlets, 1754–1789.

Edited by William G. McLoughlin. Cambridge, Mass.: The Belknap Press of Harvard University Press, 1968

大　下　尚　一

洗礼派の初期の指導者であり，アメリカ革命の前後にわたって信教の自由のために活躍したアイザック・バッカスの名前は，ごく限られた専門家の間に知られてきただけである。アメリカの歴史家の場合でもこの人物の名前を記憶にとどめているのは，教会史家か，植民地時代の研究者ぐらいであった。マクロフリン教授は，ここに紹介する二冊の書物で，この人物の埋もれた業績を高く評価し，それにアメリカ的自由の伝統の形成史上で正当な位置を与えようとしている。教授のこの目的は，バッカスの伝記とかれの著作集の刊行によって，かなりその目的を達しえたように思われる。前者はオスカー・ハンドリンの編集する伝記叢書 Library of American Biography の一巻として，後者はバーナード・ベイリンを主編者とする古典叢書 The John Harvard Library の一巻としてそれぞれ刊行されたが，この二つの叢書は，現在進行中の歴史関係の叢書の中で高い評価をえている。前者は注もはぶいた一般読者向きの体裁をとっているが，余り知られていない人物をも多く含み，これらの人物の伝記を通してアメリカの社会・文化・政治の特性を明らかにするというユニークな貢献を果している点で，専門家の間でも歓迎されている。このような叢書の役割からも，バッカスはこの中でとりあげられるに最もふさわしい人物であろう。後者は，思想を中心にした古典集とも呼ぶべきもので，その中には長らく再版されていなかったものも多い。とりわけパンフレットとして著わされたまま忘れられていた多くの文書が，良心的な編集によってまとめられて刊行されている。バッカスの巻もその好い例である。

マクロフリン (William G. McLoughlin) はブラウン大学のアメリカ史の教授であり，歴史学の側からアメリカ宗教を研究している第一人者である。20世紀初頭の信仰復興運動をとり扱った *Billy Sunday Was His Real Name* (Chicago, 1955) 以来，信仰復興運動を中心にして所謂ソシオ・インテレクチュアル・ヒストリの研究にすぐれた成果をあげてきた。かれの *Modern Revivalism: Charles Grandison Finney to Billy Graham* (The Ronald Press Company, 1959) は，アメリカ社会の特有な現象としての信仰復興運動の展開を解明した代表的研究である。また John Harvard Library から出された19世紀前半のリバイバリスト，フィニーの『宗教の復興についての講義』の編者でもある (Charles Grandison Finney, *Lectures on Revivals of Religion*, ed. William G. McLoughlin, Harvard University Press, 1960). このような教授のこれまでの研究を知るなら，教授がバッカスの研究に示した努力はどこに意図があるか，いくらか想像しうるであろう。19世紀のアメリカ精神史を特徴づける福音主義的宗教の発展を可能ならしめた宗教的自由の発端を，バッカスの生涯に求めようとしているのであり，それ故にバッカスは，アメリカ的伝統の形成の上で最も代表的な人物の一人として見なおされるべきだと言うのである。

「アイザック・バッカス(Issac Backus 1724–1806)がアメリカの社会史と思想史になした偉大な貢献は，18世紀後半に徐々にピューリタニズムにとってかわった福音主義の社会と宗教についての諸原理を，理論と実践の両面において活発に示したことであった。とく

にかれは，敬虔主義または福音主義の立場にたつ教会と国家の分離論の代弁者として，アメリカが産みだした最も強力で影響力のある著作家であった。この点でバッカスはロジャー・ウィリアムズやトマス・ジェファソンと同格に評価されるべき人である。」バッカスが今日まで無視されてきたのには，もっともな理由もあるだろう。それは，かれの著述が一般に手に入れることが出来なかったこと，かれが公立のピューリタン教会が廃止される以前に世を去ったこと，植民地時代のニュー・イングランドにおける洗礼派運動をとり扱った学者たちが，かれの役割を不当に小さく評価したことなどを指摘できる。しかしその理由が何であれ，バッカスが忘れられてきたのは不幸なことであり，それはアメリカにおける既成教会に対する多くのセクトの興起と福音主義的敬虔主義の発展を理解するにあたって，大きな溝を残してきた，とマクロフリンは言う。

ここでマクロフリンのバッカス伝にしたがって，ごく簡単にバッカスの生涯を紹介しなければならない。この伝記は九章からなっているが，それらはかれがその一生で直面した主要な課題を年代順に示している。バッカスは信教の自由のすぐれた理論家として評価されるが，かれは神学や哲学の体系的理論をあみだすためにその生涯を研究，思索，著述に捧げたのではなかった。その反対に，実践によって問題に直面し，それを解決せんとする努力の中から理論を生みだし，さらにその理論の実践が提起する問題を通して自己の理論を発展させていった。かれのかかる特質をとらえて，著者はバッカスの実践の生涯を九つの課題にまとめ，それによってかれの理論の発展を追求している。ここでそれに従えば，第一が“ニュー・ライトと古い伝統”である。バッカスは，古いピューリタン体制の中に生をうけ，大覚醒 (Great Awakening) によって新たに生まれ変って人生の道を選んだ。かれは，コネティカット植民地のタウン Norwich の普通の農民の子として生まれた。しかしバッカス家の人々は，このタウン設立の初期に曽祖父が移住して来て以来，重要な住民としてタウンや教会の役職につき，またその中にはイエール大学で学んだものもあった。典型的なピューリタン・ファーマーの出身である。しかし，この忠実なピューリタンたちも，大覚醒がタウンに及ぶまでは，回心を体験しうるような信仰の高揚を覚えることはなかった。大覚醒の影響がこのノーウィッチで大きくなると，ここでもニュー・ライツとオールド・ライツの対立がおこり，大覚醒を推進せんとする人たち——ニュー・ライツ——は，既存の教区教会の中にとどまることが出来なくなる。ただ信仰的体験のたしかさを求めていたにすぎぬバッカスは，ここではじめて既存の制度としての教会という問題にめざめた。この問題への直面の仕方は，かれの生涯にくりかえされるパタンを示しているのでやや詳しく紹介しよう。神学教育をうけていない巡回説教者の集会が牧師によって禁じられたとき，福音を説く資格が，牧師協議会の集権的権威による認可によって制限されている現実に気づく。もっとも会衆派教会の慣習によって教会の運営には教会員がまだ大きな決定権をもってはいたが，牧師の方針を認めるかどうかの総会の票決にのぞんで，教会員の中には救いの体験を得ていない多数が含まれているという事実を認識せねばならなかった。即ち，教会の自治・独立を制限するためコネティカットの教会と政府によって定められた Saybrook Platform と，信仰に基づく共同体を存続さす目的でニュー・イングランドのピューリタンが採用してきた半途契約とが，自分の醒めたニュー・ライツの信仰とあいいれぬことを知る。ニュー・ライツにとって信仰を擁護する道は，既存の教区教会から分離するしかなかった。しかし分離してもかれらは，自分たちが信仰の故に否定した教会を維持するために依然として課税される。信仰に忠実に従うなら，これを拒否すべきである。こうしてかれの母をはじめ熱心なニュー・ライツであったバッカス家の人たちは，多くの同信の人たちと共に，投獄や鞭打の刑を受けた。アングリカン，クエーカー，洗礼派などの信徒には，この宗教課税が免除されていた。しかし，新しい教派をつくることを直接意図したのではなく，既存の教会を純化することの不可能の故に分離した人たちは，果して自己の宗教的権利をどうして擁護すればよいのか。この課題こそバッカスの生涯のたたかいの原点であろう。

バッカスは牧師の道を選んだが，農耕に不満を覚えたからではなかった。“分離運動と牧師への召命”において，この問題が記されている。それは，信徒集団としての分離派の教会の牧者は，説教や祈禱の能力に恵まれた者が，信徒によって認められて選ばれるのである。バッカスは自分がかかる能力を与えられているか否かという青年らしい人生の悩みを経て，道を選んだ。牧者となってかれは，洗礼と聖餐の問題に直面する。神学教育を受けていないかれが聖書や神学の研究にとりくみ，信徒間の論争・対立に対処しながら，反幼児洗礼主義 (antipedobaptism) が信仰的に正しいと

いう信念に至る。また分離派になりながら，幼児洗礼を否定しない信徒たちとも聖餐を共にすべきかどうか——open Communion か closed Communion か——の道を選ばなければならない。これは幼児洗礼を否定して洗礼派と主張を同じくする段階で，従来からの洗礼派といかなる関係をたもつかという実際問題ともからんでくる。これらは単に神学的理論の問題ではなく，牧者であり，分離主義＝洗礼派の運動の指導者と目されるようになったバッカスにとっては，迫害の中でこの運動に参加している信徒たちの問題でもあった。とくに既存の教派として認められている洗礼派は，宗教課税について，ある程度宗教的自由が認められていたので，分離派の人たちにとって，洗礼派との合同・連携は至って具体的緊急のことがらであった。しかしそこには分離派と洗礼派の信条の相違が溝として存在していた。すなわちバッカス自身をはじめ分離派は大覚醒の影響下でカルヴィニズムを信条としていたが，これに反し，洗礼派はアルミニアニズムの立場をとっていた。また，敬虔主義的分離派が，組織や制度を拒否する志向を特性としてもっていたことも，注意すべきである。“分離主義＝洗礼派運動”“分離主義＝洗礼派と旧洗礼派”は，この間のバッカスをとりあつかっているが，そこに描かれているかれの態度決定は，急進的でなく慎重で，時には一貫性を欠くようにさえみえる。しかし具体的問題解決の中から理論的確信に到達するかれの態度と，信徒の群をまもっていかねばならぬかれのおかれた現実があった。

これはまた読者にとっては，幸いである。というのは，専門的描象論になりがちな，洗礼論，聖餐論の論義を，ニュー・イングランドの平凡な住民の具体的問題として知ることができるからである。われわれは，ニュー・イングランド史について，近年の多くの業績を通じて多くを知ることができる。大覚醒についても，ゴスタッドやゴーエンのすぐれた研究がある〔Edwin Scott Gaustad, *The Great Awakening in New England* (Harper & Brothers, 1957); Clarence C. Goen, *Revivalism and Separatism in New England, 1740-1800* (Yale University Press, 1962)〕。とりわけ後者は，分離派の運動に重点をおいており，バッカスの背景を知るうえで重要である。しかし，われわれにとっては大覚醒とその影響については，このようなモノグラフだけでは十分に理解しえない面がある。それはわれわれには，宗教的精神の高揚と社会との関係がどうしても実体をともなって想像しがたいからであろう。そのため，宗教的熱情が日常性を破り，再び社会的に定着する過程で日常性を回復していく運動の様態をよく把えなければならない。本書が，このような大覚醒の実状を，ニュー・イングランドのタウンの生活を背景にして描いていることは，われわれが当時の社会と宗教を知る上で適切な参考となるであろう。

信教の自由の実践と理論の上でのバッカスの貢献は，“苦情処理委員会”“マサチューセッツ憲法と信教の自由”“新国家の危機の時代1780-1790”などでとくに論じられている。既に言及したように，かれの信教の自由の主張は，分離派，洗礼派として体験から生まれたものであり，ジェファンンやマディソンの理神論の立場からの主張とは契機を異にしている。しかしかれの教会と国家の分離論は，その徹底性においてけっして他に劣るものではない。ここで注目すべきは，かれが迫害を体験することによって宗教的自由の強い要求を抱いたというだけでなく，その自由の獲得運動をすすめる過程で，自分の要求を理論にたかめていきえたという点である。宗教的自由を主張しながら，自分が体制の側にたつと他者の自由を抑圧するのは，歴史上実例が多い。なによりもピューリタンがそうであった。あるいは，自己に対する抑圧が除かれれば，自由を普遍的に保障する制度の実現を放棄する例も少なくない。このことは，迫害の中から生まれた運動が，しばしばプラクティカルな解決を求めるが，理論にまでたかめられないことを意味する。

バッカスは洗礼派が提唱した組織，ウォーレン洗礼派協会 (Warren Baptist Association) に参加し，苦情処理委員会 (Grievance Committee) の有力なメンバーとして，迫害をうける信徒の援助に，信教の自由のための請願運動に活躍する。この活動を通じて，かれはロジャー・ウィリアムズやジョン・ロックの思想を摂取し，またピューリタンが国教会の抑圧に反対するにあたって用いた論理を自分の武器としてとりいれていく。それは，真の信徒集団としての教会の純粋な独立性と，政府の権力に対する個人の宗教的良心の優越性とを宗教論として理論づけ，他方政府の役割と権限の限界を政治理論として確立する努力であった。これがバッカスの主張する教会と国家の分離論の論拠である。信教の自由を実現するたたかいの頂点は，独立革命期で，大陸会議やマサチューセッツ邦憲法制定会議に対して行なった働きかけであった。結果的には，マサチューセッツの公立教会は廃止されず，運動

は不成功におわった。革命後，宗教的寛容の風潮がひろまると，ほとんどの洗礼派は，迫害もうけずに宗教課税を免除されている現状に満足する。しかしバッカスは，国家と教会の完全な分離を叫び続けた。

以上のようなバッカスの活躍を，マクロフリンは興味ぶかく叙述している。ここで広く読者の関心を呼ぶのは，バッカスの信教の自由のたたかいと独立革命との関係であろう。この点を記すことが，また本書の大きな目的と思われる。この叢書の編者ハンドリンは，次のように言う。「アメリカ革命は，ほとんどの歴史家が考えたよりは，遙かに複合的であった。革命が18世紀の思想の発展に関係をもつことは，ずっと以前からはっきりしていた。独立宣言自体，自然の法について語っており，そのレトリックは啓蒙主義の諸理論を反映している。しかし革命の感情的，宗教的要素は，参加した者にも，また革命を研究してきた学者にも余り明らかではなかった。」著者が引用しているバッカスの言葉は，革命とかれの関係を端的に裏付ける。革命はバッカスにとって，イギリスに対して植民地人の市民的自由を擁護するためのたたかいであり，同時に植民地内部において信教の自由を実現するためのたたかいでもあった。革命には二つの戦線が存在したと。われわれは洗礼派が，革命に反対か，あるいは消極的であったと考えがちである。革命の推進者たちも，洗礼派の革命に対する忠誠を疑った。しかし，バッカスをはじめほとんどの洗礼派は，積極的な愛国派となった。かれらは，革命を支持した多くのアメリカ人と同様，イギリスが植民地人の市民的自由を侵害していると感じた。かれらの自由を認めようとしない人たちがイギリスに対して自由を要求するという矛盾を非難したけれども，イギリス国教会の支配の方がピューリタンの支配より抑圧的になると考えた。ニュー・イングランドでは，洗礼派は国教徒から迫害されたことはなく，むしろ国教徒は洗礼派と同じ被抑圧者ではあったが，バッカスは国教会の本質をよく見ぬきえたのである。さらに注目すべきは，バッカスが革命をアメリカに信教の自由を実現さす好機として，積極的に把えていたことである。かかる認識が，バッカスをして愛国派にはしらせた重要な動機である。1774年大陸会議が開催されると，代表たちに信教の自由を訴えるためバッカスらがフィラデルフィアにおもむいたのは，この事情を物語っている。またマサチューセッツにおける連邦憲法批准協議会に代表として選ばれて出席したバッカスの態度や，その後シェイズの反乱に対するかれの反応も述べられている。洗礼派が一般には中央集権的制度に反対であったにもかかわらず，かれは連邦憲法が貴族制と公職の信仰審査を廃止しているという理由で，批准に賛成する。またかれは，負債者の立場にある農民に同情的であり，マサチューセッツ西部の保守的支配層がかつて洗礼派弾圧の先鋒であったことを認識していたが，それにもかかわらず，シェイズの反乱を非難する。かれのかかる庶民への不信，あるいは保守性は，ウィスキー反乱においても示された。

著者はこのように，革命期におけるバッカスの社会的かかわりをかなり詳細に興味ぶかく叙述している。しかし，バッカスら洗礼派が革命の側に立つことを決意するに至る契機や過程について，また革命戦争終結後にかれが示した保守的傾向について，具体的説明が十分なされているとは言いがたい。史料的限界や伝記という本書の性格にもよろうが，この面がさらに分析されれば，革命史研究に積極的貢献をなしうると思われる。ともあれマクロフリンが，今後研究されるべき課題を提供しているのは有意義であろう。

いま一つ本書の焦点となっているのは，バッカスのカルヴィニズムが，革命後にいっそう盛んになるアルミニズムやパーフェクショニズム，あるいはディーズムとどのような関連をもつかという問題である。それは，〝洗礼派信仰の守護者〟〝洗礼派の長老ステイツマン〟等の章でとくにあつかわれている。バッカスは一貫してカルヴィニズムの擁護者であり，旧来の洗礼派がもっているアルミニズム的志向を排除せんと努力したことについてはすでに紹介したが，革命期から顕著になるアルミニズム，とりわけ第二次大覚醒の中で影響をもったメソディスト派のアルミニズムやパーフェクショニズムには，強く反対した。しかしかれのカルヴィニズムは伝統的ピューリタンのそれではなく，大覚醒の経験から生れた福音主義・敬虔主義を特徴とする。人間の堕罪よりは救済を重視し，神の絶対主権下における共同体的秩序よりは，救済による個人的・経験的信仰に重点をおいた。この点は，バッカスの伝記よりも，その著作のアンソロジーに附された長文の序で，著者はよりはっきり主張している。とくに，大覚醒後のニュー・ライツ神学は，一様にカルヴィニズムであると一般にみなされているが，ホプキンズらのニュー・ディヴィニティーとバッカスらの分離主義=洗礼派とでは，差異が大きいことを強調している。このようにマクロフリンは，バッカスにおいて，伝統的ピューリタニズムから19世紀の精神への分岐点を見る。

さらに著者は，かかる個人的敬虔主義が，アメリカにミレニアムが到来するという楽観的期待と併存していたことを指摘する。初期のピューリタンと同様に，バッカスはアメリカが神に選ばれた国であり，その使命は，真の宗教改革の遂行，すなわち神の国アメリカの実現によって達成されると信じた。これがかれにとって，独立革命と新国家建設の意味したことである。そこでは，神の国アメリカとは，聖書が示すようにカイザルのもののみに限定された政府，個人の信仰を侵害しない政府をもつ国，とりもなおさず完全な政教の分離が実現されたアメリカであった。マクロフリンが敬虔主義を中心にして，信教の自由の主張と独立の擁護とを一体として把えることによって，バッカス像を描いているのは，見事である。

しかしバッカスが連邦憲法批准やシェイズの反乱に示した保守的傾向を，敬虔主義のもつ一般的傾向から説明するだけでは，説得性が弱いと感じる読者も多いであろう。筆者もこの感じを禁じえないし，すでに指摘したように分離主義=洗礼派の 社会的背景 の分析の必要を認めるにやぶさかではない。けれども上掲のゴスタッドなどの大覚醒の研究，とくにゴーエンの分離派の分析が，この運動を一義的に社会層の相違から説明しえない点を明らかにし，革命史研究が革命の社会的複合性を示している現状において，マクロフリンのバッカス伝に対して，社会的背景の分析の手薄を非難するのは，評者の常套手段を選ぶだけになりやすい。それよりはむしろ，著者がアメリカにおける敬虔主義にあらわれる二つの傾向に目をとめて，バッカスを把握していることに意義を見出したい。

アンソロジーの序文は，伝記でマクロフリンが描いたバッカス像の要約とも言ってよいが，敬虔主義者としてのバッカスの理論を知るには，伝記よりも明解である。著者は序文を次のようにしめくくっている。「バッカスの生涯は，アメリカ敬虔主義の二つの極を示している。それは，個人の完全な道徳的，精神的自由を求める——アンティノミアン的，あるいはアナキックな——敬虔主義者と，国家の完全な道徳的秩序を要求する——神権主義的あるいは権威主義的——敬虔主義者の二つの極である。真の信者の自由を侵害する体制とのたたかいで，かれは教会制度の革命と市民的不服従をとった。しかしこのたたかいが勝ったとき，かれは権力——主権者なる神と主権者なる議会——への服従を要求した。かれは教会と国家に優越する個人の宗教的自由のために尽したが，神の法の究極的な道徳権威に仕えるキリスト教国家において，この両者がおだやかな調和を生みだすことを期待した。しかしかれは，セクト主義と多元主義とがかもし出す摩擦を生みだすのをたすけた。統一的キリスト教国家への待望と，教会と国家における個人の自由意志にもとづく制度という両極間の不安定は，自由を求めるアメリカ敬虔主義の実験において，基本的問題となってきた。」だがこの問題は個人の良心にもとづく要求へ向って開かれた「アメリカン・システム」の上におかれていた。「このアメリカン・システムの特質は，自由な個人の良心に根ざしている制度であり，バッカスはこの特質の形成期に，重要な役割を果した」と。著者の最後の言葉は，今日の眼には楽観的にすぎると映るかもしれぬ。しかし，これについては，マクロフリンが現在の信仰復興運動をも研究し，その保守的性格を指摘していること，また敬虔主義にひそむ両極性に着目し，その緊張関係からアメリカの国民性を解釈した好論文を書いていることを附記するにとどめたい〔William G. McLoughlin, "Pietism and the American Character," *American Quarterly*, Vol. XVII (Summer, 1965)〕。

最後に，バッカスのアンソロジーの内容について一言しておく。これは1754年から1805年の間にバッカスが著わし印刷された42のパンフレット中から，12を選んで収録している。内容から見ると，分離主義を弁明した教会論，反幼児洗礼論，教会と国家の分離を主張した信教自由論，メソディズムに対するカルヴィニズムの擁護論の四つに分類出来，全体の三分の二が信教自由論である。

内容的には上記の順序で12のパンフレットが配列されているがこの配列順序は，実は出版の年代順によるもので，年令的には最初が30才，最後が63才のときに書かれたものである。この年代的配列は，バッカスの思想と活動の発展をそのまま伝えていて，興味深い。この数年間に革命前夜の思想史の分野で，ハイマートやベイリンの業績のような問題提起的研究やすぐれた史料集があらわれた。〔Alan Heimert, *Religion and the American Mind: From the Great Awakening to the Revolution.* (Harvard University Press, 1965) ; Bernard Bailyn, ed., *Pamphlets of the American Revolution: 1750–1776, Vol. I* (Harvard University Press, 1965)〕とくにハイマートは，大覚醒から革命期に至る思想史研究で，革命に結晶していく自由の主張という点でニュー・ライツの役割を高く

評価し，従来の定説の修正を唱えた。これと時を同じくして，マクロフリン教授によってバッカスの伝記とその著作の選集が出版されたことは，アメリカ思想史の研究にとってよい刺激と言わねばならない。

（同志社大学文学部教授）

Language in America : A Report On Our Deteriorating Semantic Environment.

Edited by Neil Postman, Charles Weingartner & Terence P. Moran.
New York: Western Publishing Company, Inc., 1969.

石　黒　昭　博

生活環境の汚染が現代人の重要関心事となったのはつい最近のことであるが，汚染は目に見えない強い力とすさまじい速度で，人間のからだの健康のみならず心の健康まで侵している。それは人間の心が，ひいては人間の存在全体が，言語の汚染 (language pollution) によって根源的にゆすぶられているということである。

言語は人間が発明した最大のものであると言われるが，それの与えるものも大きい代り，それが人間から奪い去るものも多い。この give and take の相互作用は人間活動のあらゆる分野においてバランスを保たれているが，現代のように，言語を媒介としたマス・コミの発達した時代では，言語が人間から奪い去るものの方が，与えるものよりずっと多くなっている。こんな時代に最も根源的なものとして，しばしば問われる言語の問題を，人間の存在に関わりあるものとして，いろいろな現実的視野から眺めることがこの本の主題である。

冒頭にかかげられた Aldous Huxley のことばの中に提示された言語活動の諸面をとらえて，22の論文やレポートが，アメリカにおける言語のもたらす善悪をとりあげて論じている。1962年に Huxley が指摘したことは，8年後の今日には，急速に明白な現象として社会の各方面に現われている。

生存 (survival) はすべての生命体が必然的に追求するものであるが，本能的なものであれ，理知的なものであれ，この生存の追求をなすために，すべての生命体は考える。しかし，言語というシンボルを使って考えることのできるのは人間だけである。つまり，人間は生存をかけて，周囲の生活環境に抽象化を行ないつつ進化の道を歩み続けている。今日では，まさに編者の "Language is the key to human survival" (p. ix) "…language is man's unique instrument for survival" (p. ix) ということばで述べられている如く，人間の進む方向は言語にかかっていると言えよう。

本書はアメリカで今日使われている言語，現実を記号化するために用いられている言語，に対する検索を行なうという意図のもとに編まれたものであり，そのとりあげる項目は，政治，経済，法律，教育，出版，官僚機構，電子計算機など22項目に及び，それぞれの項目において，各著者は，はたしてそれらの世界で用いられている言語が人間の生存に真に貢献しているかどうかをチェックする。

22のすべての項目にわたって紹介することは紙面の都合で不可能であるので，評者の注意を引いたものに集中し紹介し，論評を加えたい。

Neil Postman は "Demeaning of Meaning" で，言語状況が極度に汚れていることをいくつかの例をあげて指摘する。例えば，政治家達は，記憶にまだ新しい連続的暗殺事件があったあと，その都度，「暴力は信じない」と言ったが，こんなことを公言し，それで自己の立場を表明してこと足れりとするような風潮を